

やまがたじょうさんのまる
山形城三の丸跡 (第15次)

遺跡番号	201-003
調査回数	第15次
所在地	山形県山形市旅籠町
北緯・東経	38度42分02秒・140度56分02秒
調査委託者	山形県村山総合支庁建設部都市計画課
起回事業	山形広域都市計画道路事業3・2・5号旅籠町八日町線(山形市七日町地内)
調査面積	1,873㎡
受託期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
現地調査	平成26年6月2日～12月5日
調査担当者	齋藤健(現場責任者)・東海林弘和・板橋龍
調査協力	山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	城館跡
時代	中世・近世
遺構	溝跡・土坑・柱穴・井戸跡
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・金属器・石製品・木製品(文化財認定箱数:62箱)



遺跡位置図(1:50,000)

調査の概要

山形城は、馬見ヶ崎川扇状地に14世紀後半に最上氏の始祖斯波兼頼しばかねよりにより築かれたとされ、代々最上氏が居城としてきた。17世紀初頭には、最上義光もがよしあきにより57万石の大名の居城として相応しい規模の近世城郭として三の丸まで拡張された。最上時代には、三の丸の外側に十日町や本町、七日町などの商人町の他に鉄砲町、銅町、檜物町、塗師町などの職人町が配置され城下町が整備された。その外縁主要街道沿いにも家臣の屋敷が配置され、現在の山形市街地の原型となった。

しかし、義光の死後に発生した御家騒動により最上氏は改易される。その後入封した鳥居氏は馬見ヶ崎川の流路変更工事や山形五堰の整備、二ノ丸の大規模な改修を行い、現在の姿が完成された。

しかし、17世紀末以降山形藩は左遷地となり、藩主が短期間のうちに度々変わり石高も徐々に減る。このことから、広大な城の維持は困難となり荒廃する。18世紀後半の秋元氏入封時には、本丸は更地となり二の丸内も小規模な建物が散見するだけで、藩主の屋敷は二の丸大手門の外に置かれた。藩士の住居も三の丸東半分にまとめられ、三の丸の大部分は農地となった。

城郭の衰退に反し、城下町は紅花をはじめとする特産品を扱う富裕な商人が集住していたことや出羽三山参詣の拠点として大いに栄えた。

山形城三の丸には11の口(門)があった。現在の山形市立病院済生館さいせいかん東側にあった七日町口は大手門として扱われた。七日町口内から二の丸大門までの道沿いには、18世紀前半までは重臣の屋敷が立ち並び、幕末の水野時代でも家臣の屋敷が道沿いに立ち並んでいた。

明治維新により山形城は廃城となり、明治初年には三の丸の堀や土塁の多くは撤去埋め立てられ、三の丸内に

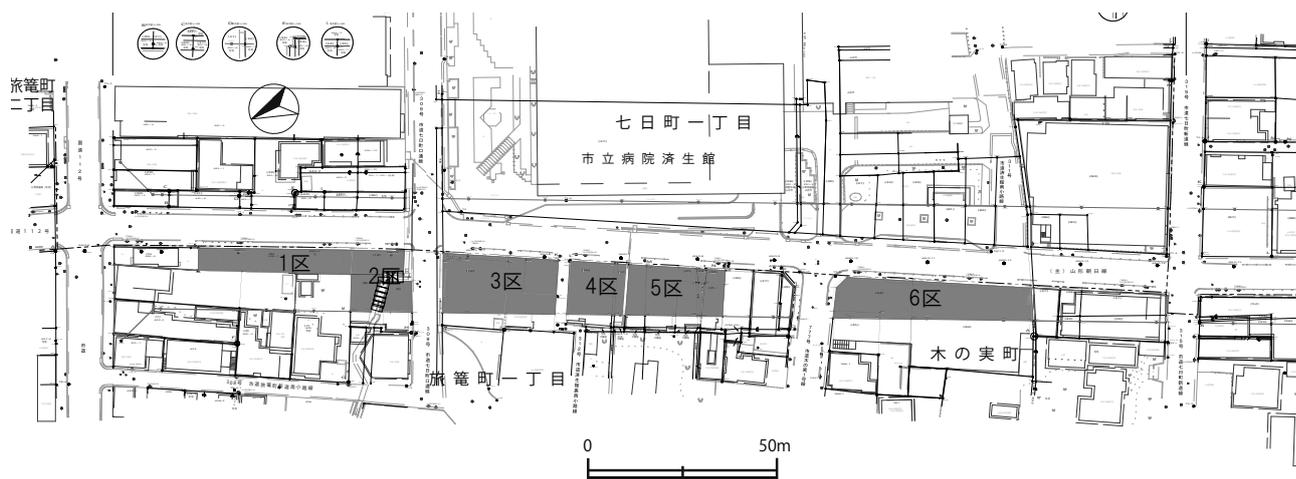


図1 調査区概要図



写真1 6区河川跡検出状況（南から）

も庶民が住居を構えられるようになり、市街地化が進んだ。また、県令三島通庸^{みしまみちつね}の指導の下、新道を建設する新しい都市計画が始まった。今回の調査起因事業である旅籠町八日町線も、この時に作られた道路である。三の丸七日町口大手門跡には、現在の山形市立病院済生館の前身である済生館病院が建設された。

近年、幹線街路の利便性を高めるために計画された山形広域都市計画道路事業の一部として旅籠町八日町線を拡幅することとなり、三の丸跡の発掘調査を実施した。

今年度は、事業区内のうち 1,873 m²を調査した。残りについては次年度以降、引き続き調査を行う。

遺構と遺物

今回の調査では、調査区を北から1～6区の6つの調査区に分けた。2区が三の丸の堀跡と見られ、1区は町家、3～6区が三の丸内である。

現在、調査区近辺の地形は南北方向は平坦で、東西方向はゆるやかに西に下がる扇状地ではあるが、近世には旧河道による起伏が有り、近代以降に盛土をして平坦化している。現地表面から数m掘り下げると、直径50cm



写真2 1区完掘状況（北西から）

以上の円礫が多数ある礫層で、流水により形成された扇状地であることが実感させられる。

3区と4区、6区は、鉄筋コンクリート建物が建てられていたため、基礎により深く破壊を受けて遺構は残存せず、近現代の盛土に遺物が混入しているだけであった。ただし、6区に近世の井戸と、礫層の地山に砂層の河川跡がわずかに残っていた。河川跡からは9世紀頃の須恵器や土師器片が少数出土している。

1区で検出されたのはほとんど近代以降の掘り込みで、近代以前の遺構と確定できるものを確認することは出来なかったが、19世紀前半の波佐見産磁器^{はさみ}などの近世の遺物も散見された。

2区は鉄筋コンクリート建物基礎が残っていたことと近代以降の「御殿堰」^{ごてんぜき}により詳細な調査はできなかったが、三の丸堀跡と推測される。現況地表面から深さ2m程で地山層とおもわれる礫層を確認できた。覆土は近代以降のもので、40年ほど前まで営業していた染物屋が使用していた藍甕が出土した。山形市が実施した市立第七小学校敷地内の発掘調査で三の丸堀跡を検出して



写真3 5区遺構検出状況全景（南から）



写真4 5区石組井戸完掘状況（北から）



写真5 5区大型区画溝完掘状況（北から）

いるが、そこも現地表面から深さ2m程であり、三の丸の堀は門周辺以外はその程度の深さであった可能性もある。次年度再調査して詳細を調べる。

5区は、近世を通じて武家屋敷が存在した地区で、水野時代も「長屋」と呼ばれた藩士の住居が大手道沿いに並んでおり、現在でも多くの子孫が住んでいる。5区は、近代以降に盛土整地し木造家屋が建っていたため、遺構の残存状況が良好であった。近代まで使われていた石組の井戸など、幕末から近代にかけての遺構も多く検出した。その下から、東西方向に伸びる長さ20m以上、幅約4m、深さ約1mほどの大型の区画溝が検出された。法面は砂で整形し、短い存続期間の後に埋め戻されたような土層で、流水や滞水の痕跡も認められなかった。時期判定の手がかりとなるような遺物が出土せず、時期判定は困難である。しかし、次年度の調査予定区へ伸びており、次年度の調査で手がかりが見つかることを期待したい。また、この大型区画溝に該当すると思われる描き込みは、各時代の絵図面では確認できない。

5区の西壁面には落ち込みも観察できた。堆積土を観察すると、最下層より17後半頃と思われる肥前産の陶

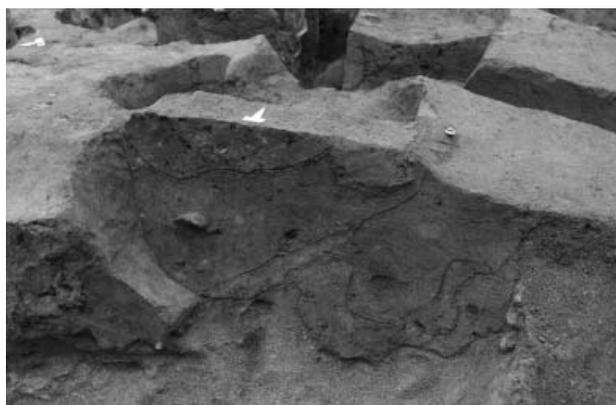


写真6 5区近世初頭柱穴（西から）

器皿のほか、小柄の刀身と家紋のような模様がついた青銅製の柄が出土した。土層は、徐々に堆積した後、幕末から明治頃に盛土をしたように観察できる。この落ち込みは西側に徐々に深くなりながら調査区外へ伸びており、区画溝であると思われる。

他にも、詳細な時期は不明ながら、近世初頭以前と思われる柱穴が重複して検出された。

巴紋の軒瓦や灯明皿として使用した痕跡がある土師質皿、寛永通宝の他にも宋銭や明銭も出土している。

まとめ

今年度の調査区は、三の丸大手門に近い地区を調査した。3、4、6区は建物の基礎工事により、攪乱を受けており、遺構は殆ど残っていなかった。しかし、6区では近世の井戸や9世紀頃の須恵器や土師器片が混入した河川跡などが検出された。

1区は三ノ丸の郭外で町家が立ち並ぶ地区であったが、近世の目立った遺構は検出されなかった。

2区には明治時代に付け替えられた御殿堰があるが、三の丸の堀跡であったとみられる。次年度に再度調査を行い詳細を確認する。

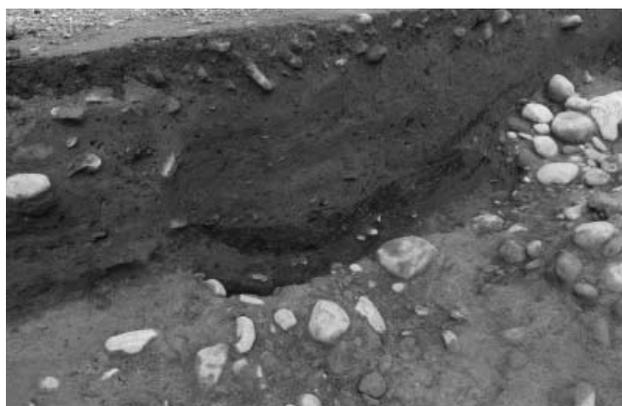


写真7 5区西壁面落ち込み完掘状況（東から）



写真8 5区落ち込み出土肥前産陶器皿（東から）

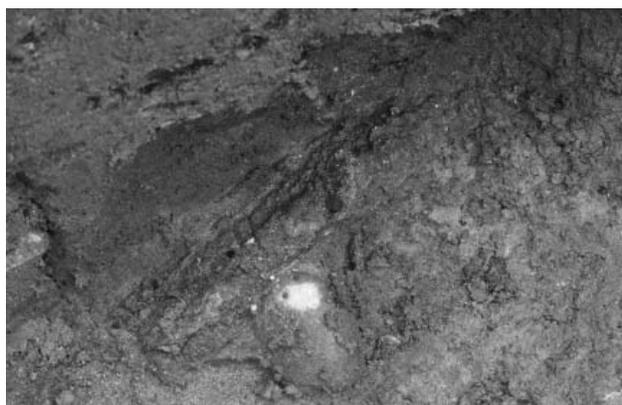


写真9 5区落ち込み出土小柄の刀身（東から）



写真10 5区落ち込み出土小柄の柄（東）



写真11 5区出土土師質皿（北から）

2区と3区間の現在の道路は三の丸の土塁で、3区が近世の道路であったとみられる。

5区は近代に盛土をしており、遺構の残存状況が良かった。最も大きな成果は、5区を南北に縦断している長さ20m以上、幅約4m、深さ約1mの区画溝である。法面は砂層で調整しており、流水や滞水した形跡がうかがえない。さらに、この区画溝は各時代の城絵図には全く見当たらないもので、埋土にも遺物の混入はなく、一度に埋め戻されており、存続期間は極めて短かったとみられる。遺構の重複状況より少なくとも18世紀前半か



写真12 5区出土瓦（北から）

ら水野期以前のものであろう。来年度以降の調査区へ伸びており、今後の調査成果に期待したい。

また、最上時代の遺構遺物は検出できなかったが、17世紀後半頃の東西方向の区画溝の可能性のある落ち込みを検出した。5区の北西端には、その前後の時期であると思われる柱穴が集中して検出された。